

サマリー

アラブ首長国連邦のエネルギー流通のハブとなるフジャイラ首長国

国際情勢分析第1グループ 松本 卓

フジャイラ首長国は、古くから外航船舶（主にタンカー）の燃料補給地として有名である。しかし近年ではホルムズ海峡の外側に位置する地理的条件の優位性から、エネルギー流通のハブとしての存在感が増してきており、2013年4月から運用が開始されたホルムズ海峡迂回パイプライン、2018年初完成予定のLNG輸入基地建設、2017年末完成予定のフジャイラ製油所新設、2016年末には貯油能力の倍増が計画されているフジャイラ石油ターミナル建設をはじめとする数多くのプロジェクトが進んでいる。

ホルムズ海峡迂回パイプラインの完成は、原油を生産・輸出しているアブダビ首長国にとって、イランによるホルムズ海峡封鎖という脅威から解き放たれ、原油を随時・安定的に輸出できるというエネルギー安全保障を手に入れることができた。

LNG輸入基地建設は、UAE全体では天然ガス不足という需給ギャップへの対策となるのみならず、将来的にはアラビア湾の奥の各国に対する天然ガス供給も可能にするビジネスチャンスを生み出そうとしている。

フジャイラ製油所の建設は、北部UAEへの石油製品供給基地としての役割に加え、石油需要の伸長著しいアジア向けに原油で輸出するか、石油製品で輸出するかという両建ての輸出方法を選択する役割も担っている。

UAEだけでなく世界の石油産業に従事する生産者、流通業者、消費者は、こぞってフジャイラのタンク事業に参入してきている。これは、新たにフジャイラが原油の積出港になったこと、将来的に製油所の稼働で石油製品の積出港にもなることと無縁ではない。

フジャイラ首長国がここまで発展する背景として、①ホルムズ海峡の外側に位置していること、②小国でありながら国家安定性が高いこと、③外資参入を受け入れる素地ができていることがあげられる。そして、今後の進み方を考察すると、アブダビ首長国やドバイ首長国の歳入を保障するプロジェクトをフジャイラに呼び込む、そのプロジェクト資金は国外に依存するという構図が考えられる。具体的な案件として、第2のホルムズ海峡迂回パイプライン構想（海洋油田から生産される原油をフジャイラまで繋ぐ構想）、アラビア湾の奥への天然ガス供給基地抗争、フジャイラ首長が推進する太陽光発電をはじめとするGreen Energy Projectを通しての天然ガス消費の抑制（＝アブダビ首長国のLNG輸出余力の捻出）などが考えられる。

こういった構想の中でも、特にわが国のエネルギー安全保障につながるプロジェクト（例えば、アブダビの海洋油田にはわが国の石油開発会社が鉅区の権益を有しており、安定的な生産、出荷がわが国のエネルギー安全保障となる）については、アイデア、技術、ファイナンス等あらゆる面での関与、参画が期待される。

お問い合わせ：report@tky.ieej.or.jp